

dictionary no.114

「言葉を失った dictionary」PDF 版を ご覧のみなさまへ

ご覧の PDF はフリーペーパー『dictionary』no.114、2月10日に発行されたものです。今号は創刊19年目にして初の試み、言葉（文章）の一切ない dictionary をお届けします。演劇、広告、音楽、雑誌、新聞、グラフィック、写真...さまざまな分野で今、何が表現できているのか、規制はあるのか、それともないのか。あるとすれば、その実体は？誌面には、ポートレートのみで登場する、各分野の一线で活躍するみなさんによる全9対談。対談映像、テキストPDFは、web、ポッドキャストにて順次公開いたします。

対談出演一覧

坂本龍一（音楽家）、茂木健一郎（脳科学者）、ヒロ杉山（アーティスト）、箭内道彦（クリエイティブディレクター）、是枝裕和（映画監督）、小林顕作（俳優）、岡田利規（演出家・劇作歌）、Jonathan Barnbrook（グラフィックデザイナー）、米田知子（フォトグラファー）、南島信也（朝日新聞）、中島みゆき（毎日新聞）、須田泰成（コメディライター）、高崎卓馬（広告プランナー）、森山裕之（Quick Japan 編集長）、ECD（ラッパー）、志人（ラッパー）、陣野俊史（音楽評論家）、桑原茂一

Podcast media CLUBKING について

Podcast CLUBKING では多彩なコンテンツを配信しています。

音声作品 映像作品 音楽作品

それぞれ異なった下記のコンテンツメニューよりお好きなものをお選びください。

media CLUBKING へのアクセス方法

iTunes Music Store Podcast Castella <http://www.castella.jp>

ケロログ <http://www.voiceblog.jp>

また下記の URL で直接アクセスも可能です

<http://phobos.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewArtist?id=191784134>

配信コンテンツ

スケジュールの詳細は Podcast media CLUBKING と WEB にて番組表を公表します。

Podcast

<http://phobos.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewArtist?id=191784134>

WEB

<http://www.clubking.com/>

インタビュー配信予定リスト

2月第3週

瀧本幹也（写真家）六ヶ所レポート再配信

2月第4週

箭内道彦（クリエイティブディレクター）×是枝裕和（映画監督）

2月第5週～3月第1週

志人（ラッパー）×陣野俊史（音楽評論家）

2月第2週

ECD（ラッパー）×陣野俊史（音楽評論家）

3月第3週

小林顕作（俳優）×岡田利規（演出家・劇作歌）

3月第4週

須田泰成（コメディライター）×高崎卓馬（広告プランナー）×森山裕之（Quick Japan 編集長）

3月第5週

南島信也（朝日新聞）×中島みゆき（毎日新聞）

対談 今、表現者たちは何を視ているのか？

ディクショナリーという方法。

気持ちの悪い 関係性でできている国、ニッポン

自由に好きなことをやっているという、ふたりの演劇人。だけれども、どこか、このニッポンの言論の現状を気持ち悪くも思っている。

マス・メディアと表現、価値観と自由さ。そんなもろもろの感慨を、ニッポンから飛び出して、世界にはばたく小林顕作と岡田利規が語り合う。

それぞれの理由

小林 チェルフィッチュって結成はいつですか。

岡田 旗揚げは97年です。

小林 宇宙レコードもコンドルズ(1)も結成は96年だから、ほぼ同時期ですね。

岡田 コンドルズ参加って、そもそもどういうきっかけだったんですか？

小林 その前から、ぼくはすごくいろいろなお芝居に出てて、あの頃、なんだかそういうのが嫌になっちゃったんですね。なんにもしたくなくなっちゃった。そうしてぶらぶらしてて、あるとき、友だちと海に行ったんですよ。浜辺でハーモニカを吹いていたら、前から顔見知りだった近藤良平がたまたま同じ海岸に泳ぎにきてて、「顕ちゃん、今度こういうのをやろうと思うから参加してよ」って、誘われたのがコンドルズだった。宇宙レコードも、なんの志もなく、たまたま学校が一緒だった友だちと「なんかやろうよ」って始めたんです。こういうことをやりたいって熱く語ったこともない。そういうテンションのままいままですっと続いてきてる感じ。

岡田 けっこう緩い感じで？

小林 そう。ダンスの意味とかも後付けで、社会的にこういう意味があるんだ！とかにしたり（笑）コントにしても受ければいいぐらいな。

岡田 宇宙レコードもそうなんですか？ 宇宙レコードは一応、演劇というジャンルですよ。

小林 うん、ジャンルは演劇。ほんとはジャンルにくくられるのはイヤなんです。でも、公演チケットを業者に委託するときジャンルが決まってないと引き受けてもらえない。ジャンルがないと発券できないらしいですよ。どうしてもジャンル分けしないといけないなら、演劇なのかなあ、と。

岡田 他の候補もあった？

小林 あったあった。やっぱり希望としては演劇欄よりはバンドの公演の頁に載っていたりするほうがいいなって（笑）。単純にそっちのほうがカッコいいでしょ（笑）。ただ、あのときはまだ楽器ができなかったんだよなあ。いいなあ、楽器のできる人はバンドを名乗れて、ズルいなあなんて（笑）。でも、まあ、演劇というジャンルにいたら、コントもダンスもやって不自然じゃないし、そういう意味では「演劇」を名乗るっていうのは一種の逃げ道にもなりうると思うんですよ。

岡田さんは、最初っから演劇指向なんですよ。

岡田 そうですね。そもそも子供のときからお話を作ったり書いたりするのが好きだったんですよ。絵は上手じゃなかったんだけど、漫画家になりたいって、ずっと思った。それは、絵を描きたいというよりも、お話を作りたかったから。

小林 影響を受けた作家とか漫画家はいた？

岡田 小学生の頃はミヒャエル・エンデとか。「モモ」や「ネバー・エンディング・ストーリー」を書いたドイツの作家なんですけど、すごく好きだった。だから、小さい頃から漫画やお話を作ってきて、高校に入ると小説を書き出したんですよ。で、大学に入ると、ぼくも演劇サークルに入っちゃって（笑）そこで友だちもできたし、やってると楽しいし…。でも、ぼくは俳優をやることには興味がないし、やるならやっぱりお話作りっていうことで脚本を書き始めたんです。

小林 ぼくの場合は、まず大学に入ったら遊べると思って、入試の教科が少ない

演劇学科と映画学科を受けて、受かったのが演劇だったっていうのがそもそものスタートで、本当は女の子にもてそうな響きのある映画学科のほうがよかったなって気持ちもあったぐらい。それで、演劇で入学してサークルにも入って、いろんなお芝居をやることになって、でも、だんだん不満が出てきた。「この演出家より、オレが自分で脚本を書いたほうがおもしろいものができるんじゃないか？」って。みんなで飲み屋に行って「オレのほうがおもしろいよ」なんて小声でつぶやいたりして...(笑)。その当時の鬱屈が自分を表現に向かわせたんですね、きっと。

岡田 いや、ぼくもそうですよ(笑)。最初はぼくが脚本を書いて、先輩に演出をしてもらったりしてたんですけど、だんだん...

小林 「オレがやったほうがおもしろいじゃんかよ！」って？

岡田 そう(笑)。もう、なんでこんなことにつきあってるんだかって、いやいやサークルに顔出してた。

小林 わかるなあ。岡田さんの脚本をちらりとでも読むと、なみなみならぬディテールへのこだわりがあるから、こりゃ、そのへんの演出家には手に負えないわって、そう思うもん。

言いたいこと、言えないこと

岡田 いまなにを言えているのか。いま、なにを言えて、なにを言えないっていう状況はありますか？

小林 あると言えばある、ないと言えばない。そんな感じなのかな。そもそもなにを言いたいのか、自分ではわかっているのかっていう問題があって、ぼくの場合は日常生活でひっかかったこととか、イラッとしたことをきっかけにキャラクターを造形したり、そいつにこんなことをさせたらおもしろいんじゃないかって発想になっていく。そして、「じゃあ、このキャラクターはこういう目にあわせてやろう」って話が転がって、その「こういう目にあわせたい」っていうのが、

実は自分がそのときいちばん言いたかったことだったりするのかなって思いますね。

岡田 ぼくは、最近、自分の作るものがすごくメッセージ性が強くなってきて自覚してるんです。声高なメッセージというのかな、いや、声高までではないか。

小林 でも、新国立劇場でやるぐらいだから、そのメッセージ性も含めてチェルフィッチュの言いたいことは受け入れられているってことでしょ。

岡田 それも悩んだりするところなんですよ。新国立劇場って、すごくオーソリティってことでしょ。そんな場所で自分はどう振る舞っていいのかって考える。自分のやりたいことをやればいいって思いもある一方で、場に合わせる必要もあるのかな、とか？

小林 場に合わせるって？

岡田 新国立劇場っていう劇場自体についての固定のお客さんがたくさんいるんですよ。そこでやっている舞台なら、とりあえず全部観ておく、みたいな。ふだん、ぼくたちの公演を観るわけない人たちも、新国立劇場でやることで観てくれるわけだから、六本木のライブハウスでやることをそのまま持ってきていいのか、そういう人にもわかってもらえる内容にしたほうがいいんじゃないか、とか。そういう意味では今回の『エンジョイ』(2)はすごくわかりやすくしたつもりなんです。そうすると、「あいつは日和った」とか言われそう、ってのは分ってたんですけど、そういう瑣末な批判なんか気にしないでおこうと。いや、ちょっと気になったりはするんですけど(笑)。どう見られてるとか、そういうの、気にします？

小林 しますね、実は。だから、ぼくはもう一時期はネットとかを覗くのをやめちゃいましたもん。自分は好きなことをやって、それに賛否両論があるっていうのはあたりまえなんだけど、なんだかやっかみとしか思えないようなのもあって、なんか、頭がパンクしそうになっちゃった。いまはね、だいぶ耐性がついてきて、「いろいろ言われるのは、ボクが人気があって可愛すぎるから嫉まれてるんだ！」って思うようにしてるんだけど(笑)。

岡田 ああ、それいいですね（笑）

小林 でしょ。なんかいろいろ言われたら「やっかんでんだ、オレの才能を！」ぐらいに思っていればいい。そうすると、すごく楽になりますよ。でね、楽になると同時に自分のことをすごく客観的に見れるようにもなるんですよ。

岡田 ああ、いい評、わるい評、どちらもあればそれでいいやって思いはありますね。

小林 そうそう。プリンス（3）が全盛期の頃はアンケートで「いちばんカッコいいアーティスト」と「いちばん気持ち悪いアーティスト」の両方で1位だったじゃないですか。ああいうのがいい。ぼくらも、「抱かれない男」と「抱かれたくない男」の両方でナンバーワンにならないと（笑）

押し付けの価値観にNOを！

岡田 カーテンコールって何回ぐらいやります？

小林 ものすごい数をやりますね。10回までいったことはないけど、求められる限りはやる。求められる限りというよりは、求められる前に出て行く（笑）

岡田 それはすごい（笑）

小林 「お前、もういいよ！」ってお客さんに思われたい（笑）。もうお客さんが帰ろうとしてるのに、まだ出て行く。それが恒例となっちゃってるんです。

岡田 そういいのはいいなあ。なんだか、カーテンコールでお客さんとの気持ち悪い関係性を感じるときってあるじゃないですか。あんたたち、本当に感動してダブルコールしてるんですか、総立ちになってるんですかって（笑）

小林 コンドルズの場合はダンスやライブっぽいから立ちやすいっていうのもあるんだろうけど、でも、東京のお客さんよりも地方のほうが総立ちになりやすい。あれ、なんなんだろう。

岡田 東京でも、外タレの場合は舞台であっても総立ちになりやすいでしょ。

小林 うん、あれは狂ってるよね。気持ち悪い。外人ならいいのかって。敗戦の

記憶が甦っちゃうのかな。

岡田 なんか、日本人同士だと握手したりハグしたりしないのに、外人とだったらするみたいなのあるでしょ。スタンディングもそういうのの一種だと思ってるのかな？

小林 ああ。なんか、外人と対するときの暗黙の決まりがありますよね。「ハイ、スタンダップ！」みたいな（笑）。やっぱり西洋に踏みにじられた国だから仕方ないんじゃないですか。歌舞伎って、カーテンコールや総立ちってあるのかな。

岡田 いや、ないですよ。幕が閉じたらそれで終わり。

小林 そうか。やっぱり、日本にはもともとないものだったんだ。ハンバーガーやコーラと同じだな。輸入文化だから気持ち悪いんだ。

岡田 ぼくはまだカーテンコール2回ってのは受けたことがなくて、気持ち悪いからいいんだけど、一度ぐらいはそういう経験をしてもいいかななんて思っただけで、新国立劇場でやれば、そういう経験できるかなって。そういう期待はありましたね。

小林 おお！ で？

岡田 こなかったですね（笑）。

自分たちの立ち位置と居場所は？

岡田 好意的な評やリアクションが帰ってきても、それはそれで居心地が悪くなるようなところはありません？ ぼくは、なんか、いつもそれがあるんですよね。

小林 うん、それはある。とくにコンドルズの時かな。コンドルズでコントをやっているとき、ぼくの表現したいこと、出したいことをわかってくれる人間は客席にひとりもいない！ そういう気になる。

岡田 ひとりも！

小林 そう、ほぼいない。いいリアクションが返ってきても、反応するのはそこじゃないでしょ！ って思いが強いんです。

岡田 追いついてこない？

小林 そうそう。それでも、このところはだいぶ追いついてきてくれたかなあって思うところはあるんですけどね。古いネタとか、回数を重ねると、うん、そこ！ってリアクションがある。

岡田 なるほどね。お客さんが追いつくのをちょっと待ってあげたりはしないんですか？

小林 しないなあ。します？

岡田 ぼくもしないんですけど（笑）。

小林 べつに意地悪をしてるわけじゃなくて（笑）、待つなんていうのも傲慢でしょ。やりたいことをやりたいようにやるっていうのが誠意だし。

岡田 うん。でも、外国でやるときはどうですか？

小林 やりたいことをやっていますよ。その上で、日本でこういうふうに表現して伝えたのだから、その国でもまったく同じようにやる。それができないのならば、その国にあわせて全部変えちゃう。

岡田 作り直しちゃう？

小林 日本のままやって通じないなら、その国ならではの要素を入れて通じるようにしちゃう。言葉もその国の言葉でコントもやる。そうするとけっこう通じちゃうんだよね。たとえばニューヨークに行ったとき、日本でやった独裁もののコントを、英語で「いまのアメリカもこうなんじゃない」って要素を入れたら、びっくりするぐらいに受けたんですよ。

岡田 ぼくも今年（2007）はじめて海外に舞台を持っていくんですよ。やっぱり、発見することが多いですか？

小林 海外でいちばん思ったのは、日本って、批評する側が未熟だなってこと。自分発信で物事を判断するって面が弱い。それは、外国を巡ったときにすごく実感するんです。外国で、そこでは全然知られていないぼくらがステージをやると、おもしろいと思ったら客席がどっと湧くんですよ。でも、つまんなかったら見向きもされない。そこはもう、はっきりしてる。だからこっちも綱渡りの的に死ぬ気

でステージに立つ。日本の場合は、コンドルズとかもう名前が売れてるでしょ。テレビで紹介されたから、コンドルズってっすごいんだって信じちゃってる人が見に来る。こちらの出来がいまいちでも笑う。テレビで紹介されたからおもしろいんだって自分に言い聞かせて笑うんですね。自分自身の価値観で判断することができなくなってるんですよ。で、お客さんをそうさせたのは、メディアの責任。岡田 でも、どこの国にだってメディアってあるでしょ。

小林 もちろん。でも、日本ほどメディアによる価値観が確立されてる国って珍しいと思いますよ。どの民放のニュースでも、同じ時間に同じニュースを流してるし、それはもう価値観の集団爆撃みたいなもの。どのニュースを見ても同じことしか言ってない。アメリカだと論調もばらばらで、見たいニュースを自分で選ぶことができるでしょ。民放もケーブルテレビもちがう価値観で放送している局があるから。うん、外国に行くとすごく日本のことがクリアに見えますね。

岡田 ああ、それでわかった。外人で総立ちになるっていう現象を見て腹が立つってというのは、きっと、自分発信の価値観から立ってるわけじゃないのがわかるからなんですね。自分の価値観で「これはいい」って立ち上がってるんだったら、腹は立たないと思う。外人だから「評価が決まっているもの」として決まりごととして立ってるからむかつくんですよ。

小林 やっぱり自分発信の価値観を持つってすごく大事でしょ。日本ではどんどんそういう人が少なくなってるんだよなあ。ほら、雷親父って、むかしいっぱいいたでしょ。雷親父って、まさに自分発信の価値観を持った人だと思うんだけど。他人の目を気にせず雷を落として（笑）。昔のプロ野球の人のいないパリーグの球場でヤジを飛ばしてたオヤジとかもそうでしょ（笑）。

岡田 減ってますよねえ、きっと。

小林 そういうオヤジがつまんない外人のステージとか見たら、「おら、金返せ！」って平気でヤジを飛ばせると思うもん。そういう層を演劇のお客さんに増やしていかないと（笑）。

岡田 雷親父を増やす。でも、ちょっと怖いなあ（笑）。

注釈

(1) コンドルズ

日本のみならず、海外でも高い評価と人気を誇る近藤良平を中心としたダンス・カンパニー。小林も主要メンバーとして参加。

(2) 『エンジョイ』

2006年に新国立劇場で上演されたチェルフィッチュの最新作。

(3) プリンス

アメリカのロック・スター。独特の個性と作品で大きな人気を得るとともに、奇行も話題に。

プロフィール

小林顕作 (Kensaku Kobayashi)

GLove 所属。宇宙レコードでは作・演出、出演をこなし、客演する舞台もストリートプレイからモダンダンスまでと幅広く、まさに「マルチ」と言った言葉がぴったりの俳優。それ以外にも、フォークデュオとしての音楽活動や TV ラジオの番組、CM ナレーションの仕事も数多い。

岡田利規 (Toshiki Okada)

劇作家・演出家。1997年「チェルフィッチュ」結成。cheifitsch (チェルフィッチュ) とは、selfish が明晰に発語されずに幼児語化した、という意味合いを持つ造語であり、現代の日本、特に東京の社会と文化の特性を現したユニット名。05年『三月の5日間』により第49回岸田國土戯曲賞受賞。演劇というシステムに対する強烈な疑義と、それを逆手に取った鮮やかな構想が高く評価された。現代を象徴するような台詞と、それを話す際の日常的所作を誇張しているような / していないような身体性はダンス的とも評される。第54回、横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。